

係り結び体制末期の新旧連立形式

— 機能の新旧連立性 —

山口 堯二

- 一、はじめに
- 二、古代語の係り結び体制
- 三、係り結び体制の衰退
- 四、中世における新旧連立形式
- 五、副助詞「ばし」の振る舞い
- 五の一、禁止表現と「ばし」の共起
- 五の二、疑問表現と「ばし」の共起
- 六、おわりに

文中の特定成分を卓示強調するため、文の論理的な成分関係に強い情意の介入する仕組みであった、狭義の係り結びは、論理的な成分関係を示す格助詞の振る舞いなど、その周辺の構文規則とも関連しながら、古代語の構文を構造的に特徴づけていたと言える。

本稿は、そういう体制的なありように注意するとともに、中世における係り結びの崩壊とその周辺の諸現象とを、古代語的な旧い構文体制が、文の成分の論理関係を重視する、近代語の新しい構文体制に移っていく過程として捉える試みである。

具体的には、そうした体制的な観点に立つて、旧い係り結び体制の衰退していく中世には、体制の推移を円滑化するため、新旧の機能の連立した形式が、種々の形で認められることを、重点的に指摘している。

一、はじめに

係助詞「ぞ」「なむ」「か」「や」の係り用法に対して、文末の活用語が連体形で結ばれ、「こそ」の係り用法に対しては已然形で結ばれるという、古代語のいわゆる係り結びも、構文規則上、それだけが孤立した規範として存在していたはずはない。当然その周辺の構文規則と連関しつつ、それは維持されていたであろう。中世にその係り結びの規範が崩壊することは周知の事実であるが、そういう通時的な変化も、その周辺の構文規則との連関性を含めて進行したであろう。そういう見通しのもとに、古代語のいわゆる係り結びを一つの構文体制として捉え、中世におけるその崩壊も、その構文体制の衰退と、それに取って替わる新しい構文体制への移行として捉えることができれば、いわゆる係り結びの崩壊の過程も、それだけに問題を限った見方に比べて、多少とも立体的に描けるのではないだろうか。ここではそういう試みをしてみようと思う。

二、古代語の係り結び体制

いわゆる係り結びの周辺には、係助詞「は」「も」における文末との呼応現象を含めて、より広義の係り結びが考えられる。そういう広義の係り結びとは区別する意味で、

いわゆる係り結びは、以下、狭義の係り結びと呼び、その周辺の構文規則との連関性を含めて、その影響下に構造的に特徴づけられた古代語の構文規則のありようを、係り結び体制と呼ぶことにしよう。

だが、一口に周辺の構文規則との連関性といっても、古代語においてどういう構文規則が、狭義の係り結びとどのように連関性をもっていたのか、その判定を共時的に下すのはなかなかむづかしい。周辺の構文規則との連関性も、やはり通時的な動きの中でこそ明らかにすると見てよいだろう。

狭義の係り結びに近接する、それと類似の構文規則として、まず念頭に浮かぶのは、広義の係り結びと呼ばれる現象である。なかでも、その最初に上げてよい、係助詞「は」「も」と活用語終止形との呼応は、宣長の『紐鏡』『詞の玉緒』において、すでに連体形・已然形で結ぶ狭義のそれとともに、「三転」の一つとして取り上げられている。そのさらに周辺には、川端善明「係結の形式」（『国語学』一七六）が上代語のそれとして指摘している、「形容詞系・体言系の係結」や「係の助詞と結の助詞との、助詞相互の係結」なども、それぞれ何らかの程度に関連しあっていたことであろう。

しかし、係助詞「は」「も」の係り用法のうち、終止形

との呼応や、「大和は（波）国のまほろば」（記歌謡・三〇）式の、いわば体言終止法などは、通時的にこれというほどの変化を見せることなく、近現代語まで維持されている。その意味で、通時的に見れば、係助詞「は」「も」による広義の係り結びには、狭義の係り結びとの連動性に乏しく、したがって、狭義のそれを中心とする係り結び体制とも、むしろ連関性に乏しい面もあると見なければならぬ。

構文規則としての類似性から言えば、係助詞「は」「も」による広義の係り結びも、狭義のそれに近い存在であったはずだが、むしろそれだけに、狭義の係り結びの崩壊に伴う近代語への体制的な移行に際しては、その移行を底辺で支える、支柱ないしは回転軸のような役割も果たしたのであろう。

狭義の係り結びは、確言的な働きをする「ぞ」「なむ」「こそ」と、疑問表示の働きをする「か」「や」とに分けることもできるが、いずれも上接の特定成分を卓示強調する強い情意の介入により、主述関係を初めとする文の主要な成分を二分することになる構文上の仕組みであった。そのように概括して考えれば、古代語の係り結び体制において、狭義の係り結びと連関した周辺の構文規則には、係助詞の機能とは対照的に、文の成分同士の論理的な関係を表

示する格助詞、中でも基本的な成分関係である主述関係を明示する主語表示のそれがまず考えられてよい。

格助詞「が」「の」を使用する主語表示は、古代語では準体句・従属句・喚体性の句といった文脈に限られ、通常の単文・主句に見られる終止形終止句には用いられないという用途の制限があった。たとえば次のように、主句や単文の中の主述関係については、それを表示する格助詞は現れなかった。

(1) 夜ふけて、やゝすゞしき風ふきけり。螢たかくとびあがる。(伊勢・四十五)

そういう用途の制限も、単文・主句に多用された係り結びとの連関において把握すべきであろうことは、すでに論じたことがある。本稿の視座からその折にした指摘を言い換えれば、そういう格助詞の用途の制限も、係り結び体制の一環として捉える必要があると指摘したことになる。

係り結び体制の一環というありようは、語的成分同士の関係表示だけでなく、句と句の論理関係の表示を担う接続法にも、ある程度うかがうことができよう。前句を統括する活用形とともに、その接続の機能を担う接続助詞には、広義の係り結びに用いられる係助詞「は」「も」を重要な語源とするものと、格助詞に由来するものとが古代語から

あった。接続助詞「ば」「ど／ども」「とも」などは、前者の代表的なものであり、接続助詞「を」「に」などは、後者の代表的なものである。前者の形式による接続法は、必然的な論理の表示性にすぐれる意味で特に条件法と一般に呼ばれるが、古代語ではその形式が幅を利かせ、順接・逆接、仮定・確定の組合せによるきわめて対応性に富む体系を構成していた。しかし、近代語ではその条件法の体系も崩れて、むしろ格助詞に由来する後者の形式が接続法の中心になってくる。そういう通時的な推移に照らして考えれば、古代語の接続法における条件法形式の成立・維持には、格関係の表示に対する係り結び（広義の係り結びも含めたそれ）の優位に支えられた面が認められよう。

たとえば、同じ形式名詞「もの」と一体化した接続助詞でも、格助詞の關係表示力に依存する「ものの」は、中古語に現れて後世まで繼承されたが、係助詞「は」による「ものは」の、随伴的な關係を示す次のような接続助詞的用法³などは、中古語にしか認められない。

(2) 弟子どもにあはめられて、月夜にいで、行道するものは、遣水にたふれ入りにけり。（源氏・あかし）

後世に比べて係り結びの優位が接続法に強く影響していたことを思わせるのである。

そういえば、形容詞を述語とする前句を仮定条件にする

助詞は、古代語以降長らく「ば」ではなくて、係助詞と同形の「は」であった。

(3) こひしくはしたにをおもへ紫のねずりの衣色にいつなゆめ（古今・恋三）

係助詞「も」にも、たとえば次のように、古代語ではそれだけで逆接の条件關係を示すと見うる用法もあった。

(4) なき人のすみかたづねいであたりけむしのかんざしならましかば、とおもほすも、いとかひなし。（源氏・きりつぽ）

たとえば、このような現象も、係助詞「は」「も」が、一面では係り結び体制の中で、その働きを広げていたことをうかがわせる。係助詞「は」「も」による広義の係り結びには、狭義の係り結びとの連動性に乏しい面のあることも先述の通りであるが、少なくとも接続法に関しては、むしろ係り結び体制との同調性が強かったと言えるのである。

三、係り結び体制の衰退

すでに述べた係り結び体制という構文体制を考える立場に立てば、中世における狭義の係り結びの崩壊も、やはり係り結び体制全体の変化・衰退の問題であり、係り結び体制に取って替わる、新しい構文体制への推移を示すものと見なければならなくなる。

しかし、そう見る場合も、その体制の推移については、順序としてまずその中心となってきた狭義の係り結び自体の崩壊に注意しなければならない。その崩壊の最もわかりやすい現れは、係助詞「ぞ」「なむ」「か」「や」「こそ」の係り用法に對して、たとえば次のようにその結びに乱れが生じだすことである。

(5)「このわたりに隅田川といふ川の待るなるはいづくぞ」と問へば、「これなんその川なり。この橋をばすだのはしと申し侍る。……」（とはずがたり・四）

(6)さすがに頼朝は、果報いみじき大將軍にてましくければ、とかくのがれ給ふぞめでたけれ。（伽・唐糸さうし）

(7)定テ秋雨ニ松菊荒テコソアルラ、ンゾ（四河入海・二五・四八ウ）

このような結びの乱れは、それらの係助詞による情意の介入が、必ずしもその文末まで影響するものではなくなってきたことを示すものと見てよい。中世には、助詞「か」「や」の文中用法にも、後述のように機能面で副助詞化の認められる例が出てくるが、確言系の係助詞だったこれらに對する結びの乱れも、同様にこれらの助詞の機能面における副助詞化をうかがわせるものである。

狭義の係り結びの崩壊は、それらの係助詞による情意の

介入が併せそなえていた文末への影響力の低下を意味するが、それは文の成分同士の論理関係を重視して、主要な成分を一つに取りまとめようとする時代の要求と表裏するであろう。そういう要求に基づく変化は、おのずから主要な成分同士の論理関係を明示化する動きにもつながるはずである。そう考えれば、古代語では単文・主句の主語表示に用いられなかった格助詞「が」「の」が、院政期ごろからその単文・主句にも次のように姿を見せはじめるのも、係り結び体制の衰退を逆に示す出来事と見てよいことになる。

(8)わらずぢ一すぢが、柑子三つになりたりつ。（古本説話・五八）

・バンケイニハ日ガ山ノハエヲツルゾ。（玉塵抄・三）

(9)「いかなる人にか」と尋られけるに、「西行と申す物のまいりて候」と申しければ、（古今著聞集・宿執）

・此程都に隠れなき、村岡のまさときとて、名譽の博士の有と聞く。（伽・酒吞童子）

格助詞「が」「の」のこういう用法は、時期的にも狭義の係り結びに乱れが生じ始める時期と重なって出現しはじめるのであり、その意味でも係り結び体制が変化し始める、その動きの一環と理解してよい。両者の間には、深い連関性があると考えられる。

係り結び体制の一環というありようが、句と句の論理関

係の表示を担う接続法にも、ある程度うかがえることはすでに述べた。古代語では係助詞に属する「は」「も」を重要な語源とする条件法の形式が幅を利かせていたが、中世以降は、格助詞や、その働きを形式名詞で補強した「形式名詞＋格助詞」に由来する接続助詞の役割が逆に大きくなっていく。たとえば次のようなものが、その後者の一例である。

(10) 少しためらひ候ところに、やあいかに仲光おくれたるかと、(謡・仲光)

(11) 龍ト云モノハ変化無窮ナホドニ、サラニナントセウトモ不知ゾ(史記抄・老子伯夷伝・一〇三才)

(12) そのお奉行キリシタンのことをうち崩^{やぶ}いてからは、そのまま上^{かみ}罷り上られてござるさかいに、何もえ致しまらせいで、(コリヤード懺悔録)

その意味で、このような変化もやはり係り結び体制の衰退と、どこかで連動するその周縁的な現象と見てよいであろう。

古代語では、主述関係を基本とする、二元的な述体性の句の一方に、それと対比すれば連体関係が基本と言つてよい、一元的な喚体性の文の構成も盛んであった。喚体性の文はその構造上、強い一元性・一体性をそなえ、意味的には「ことよ」的な詠嘆性、または、「のだ」的な主張性とは

いった、強い情意性の特徴とするものであった。⁽⁶⁾ その情意性の強さは、文の論理的な成分関係に介入する狭義の係り結びのそれに通底する性質のものであるから、古代語における喚体性の文構成の盛況も、係り結び体制にとっては、その中心に近接する一環であつたと見てよからう。したがって、近代語における喚体性の文構成の衰退や、その構造上の述体化傾向も、やはり係り結び体制の衰退と連動する現象と見てよいと思う。

古代語においても、述体性の文と喚体性の文の構成には、一方を基盤に他方を構成できる密接な相互交渉が認められる。⁽⁷⁾ たとえば、本来述語となる勢いの活用語も、次のようにク語法やその活用語の連体形によつてその文を統括すれば、述体的な構造を基盤にしながら、喚体性の文を構成することができた。

(13) 波のむたなびく玉藻の片思ひに我が思ふ人の言の繁けく、(言乃繁家口)(万葉・十一・三〇七八)

(14) 間なく恋ふれにかあらむ草枕旅なる君が夢にし見ゆる

(客有公之夢尔之所見)(万葉・四・六二二)

・けふわかれあすはあふみとおもへども夜やふけぬらん袖のつゆけき(古今・離別)

・雀の子を犬きが逃がしつる。伏せごの内にこめたりつるものを。(源氏・わかむらさき)

例(14)のように活用語の連体形によって統括される形式は、山田孝雄が「擬喚述法」と呼んだものであるが、その山田文法に発する「述体」「喚体」の用語を、少し融通が効きやすくする意味で、述体性・喚体性と呼んできたのも、両者の間に密接な相互交渉を考えるからのことである。

なお、例(13)(14)のような喚体性の文においては、主語表示の用途に文脈制限のあった古代語の格助詞「が」「の」も、主語表示に用いられた。例(14)の形式におけるそれは、宣長の『詞の玉緒』にも早く指摘されているところである。喚体性の文に主語が頭在する場合、格助詞「が」「の」が用いられたのは、その喚体的な一元性・一体性を保つためにも、「が」「の」による論理関係の明示によって、それらの成分の論理関係を緊密化することが必要だったのではないか。

これらの喚体性の文は、その基盤になっている述体的な構造から言えば、単文に相当するものであるだけに、こういう場合の格助詞「が」「の」の振る舞いは、他の準体句・従属句・喚体性の句といった文脈に現れる場合と併せて、係り結び体制のもとにおいても、格助詞「が」「の」自体は、必要さえあれば、主述関係を明示できる機能をそなえていたことをうかがわせるのである。

狭義の係り結びは、係助詞「ぞ」「なむ」「か」「や」に

よるその場合、その結びとなる連体形の、終止形に対する示差機能に支えられていた。しかし、周知のように中世には、その活用語連体形に終止形と同化する現象が進行した。その終止形同化現象も、狭義の係り結びの崩壊なしには、進行し得なかったであろう。そう考えられる意味で、連体形の終止形同化現象も、やはり係り結び体制の衰退、ひいては文中成分の論理関係をより重視する新体制への移行と、切り離せないものであろう。

四、中世における新旧連立形式

係り結び体制はその名にふさわしく構造的なものであったから、あまり短期間のうちに急激に変化させることは不可能なものであった。その体制の末期に当たる中世には、旧い体制の効用も部分的に維持しながら、主要な成分をまず一つに取りまとめて、文中成分の論理関係も重んじるという、いわば新旧連立的な形式が種々姿を現している。新しい体制への変化・移行を円滑に進めるためには、そういう過程も避けがたいものであったであろう。しかし、新体制への移行が完了すれば、そういうありようは当然その効用や必要性を失って消滅することになる。その意味で、新しい体制への変化・移行を円滑化する新旧連立形式は、当然中世という時代だけの特徴づけるものになるはずである。

旧い係り結び体制の効用と論理関係を重んじる新しい時代の構文要求とを抱き合わせにした新旧連立形式は、まず狭義の係り結びと見られている現象自体にも認められる。

係助詞の介入が、たとえば「かたき事どもにこそあれ」(竹取)のように、指定辞や「指定辞十その他の辞」が体言に付いた形の述語層に対してなされることは、古代語から普通にあつた。しかし、たとえば次のように、体言ではなくて、活用語連体形による準体的な句に同様の指定辞等が付く言い方においては、少し事情の異なることが多い。

(15) さるべきにて、御爪もおち、おさなくおはします人に
もおほせられけるにこそは侍りけめ (大鏡・藤氏物語)

・此ハ屋盗人ノ入ニタルニコソ有ケレト思テ (今昔・二十九・四)

・内ニモ外ニモタミアルマ、ニテカザルコ、ロナキヲ、
誠心トハナツケタルニコソ候メレ。(法然消息・大胡実秀宛)

これらの傍線部に上接する、準体的な句を統括する用言述語は、活用語本来の作用的な意味を表面化させて、実質的な述語性も担いやすく、それだけそれに下接する「指定辞十その他の辞」なども、むしろ助動詞的な純度を高める

ことになりがちだからである。⁽⁹⁾

その意味で、こういう例における係助詞「こそ」の介入は、たんなる述語層へのそれというより、むしろ助動詞層への介入と言つてよいものになっている。ということは、そうして介入した結果も、係り結び本来の、特定成分の卓示強調とは意味をずらせて、いわば確言的なムード自体の強調へと移行しているだろう。逆に言えば、形の上で係り結びが適用されているが、そこで述べるべき事柄は、その適用圏外において一つに取りまとめられており、係り結びによつて文の主要な成分が二分されるということにはなっていない。外形上は通常の係り結びと同じでも、特定成分を卓示強調する強い情意の介入によつて主要な成分を二分する、本来の係り結びとは、変質していると見てよいだろう。

このような位置への「こそ」の適用がめだつてくるのは、院政期ごろである。そのころのそれは、時期的にもそこで述べるべき事柄をまず一つに取りまとめ、主要な成分関係を明確にしようとする構文上の要求が、顕著になってきたしるしと解釈することが可能である。外形の上では旧体制の係り結びを維持しながら、同時にその新しい時代の要求にも適合する道が選ばれていることになるから、こういう位置に適用された係り結びは、その機能の質において新旧

連立的であると言えよう。

「こそ」の介入したこのような助動詞層のうち、次の例(16)に示す「にこそあなれ」式の推定表現の形式には、やがて例(17)に示すように「ごさんなれ」という形態上の一体化が生じる。

(16) それをなづけて五時教とはいふにこそあなれ。(大鏡・序)

・実ニ一定其ノ衣ト見給ハミ、聖ヲ捕ヘテ可問キニコソ有ナレト云ケレバ(今昔・二十九・九)

(17) よしく、をのれらは内府が命をばをもうして、入道が仰をばかうしけるごさんなれ。(寛一本平家・二・小教訓)

同様に、例(18)に示す「にこそあめれ」式の推定表現の形式にも、例(19)のように「ごさんめれ」という形態上の一体化が生じた。

(18) おほやけ、大臣・大納言にもなさせ給ぬべかりしかど、御まじらひたえにたれば、たゞにはおはするにこそあめれ。(大鏡・道隆伝)

・此ノ驚ハ此ノ蛇ニ被蕩ニタルニコソ有メレ。(今昔・二十九・三十三)

(19) あツばれ、是は斎藤別当であるごさんめれ。(寛一本平家・七・実盛)

「こそ」の介入した助動詞層のこのような一体化も、そういう位置への係り結びの適用が、時代の要求にかなう構文として、いかに慣用されたかを示すものである。

疑問系の係助詞による係り結びにも、中世には同様の現象が認められる。次のように「指定辞+推量辞」が準体的な句を承ける形で、やはり助動詞層に適用されることが盛んになり、そういう形式が慣用されたのである。

(20) 「……何ニシテ、我が食物ヲサヘ持来タルニカ有ラム。

若シ異夫ノ有ニヤ有ラム」ト思ヒケレドモ、(今昔・二十九・三)

このうち、「にかあらん」には、疑問詞との共起を要するという制限があったが、そういう制限のない、「や」の介入した「にやあらん」からは、その慣用に伴う一体化によつて、次のような「やらん」が形成された。¹⁰⁾

(21) 百鬼夜行にてあるやらんと、おそろしかりける。(宇治拾遺・十二・二十四)

・「実政ヲモチテ隆方ヲコサレ候シコトハイカミ候ベカラン。ヲボシメシワスレテ候ヤラン」(愚管抄・四)

・「御酒ハ参リ候ヤラム」ト問ヘバ(梵舜本沙石集・七)このようにして形成された「やらん」は、語源的には「指定辞+推量辞」を含む複合辞であるが、意味的には疑問系の係助詞「や」との類義性によつて、最も端的には疑

問表示の終助詞と見るものになった。「やらん」はこうして変質した係り結びによつて形成された形式であるが、その終助詞としての「やらん」を使えば、その文に表示すべき事柄は一つに取りまとめた上で疑問表示ができる点、すでに述べた新しい時代の構文要求にも沿えることになっている。その意味で、終助詞「やらん」も、明らかに新旧連立的な形式であると言えよう。

しかし、「やらん」が係助詞「か」「や」と並ぶ疑問助詞として、終助詞性を維持する期間は短かった。「やらん」や「ら」は、中世のうちに早くも、挿入句での用法から、たとえば次のように、むしろ文中成分を不定化するだけの副助詞性を高めていくからである。

(22) 今年は八十七やらむになり候。(惠信尼消息・文永

五・三・一二・覚信宛)

・ナニ、ヤラオドロキテ恐タル気色ニテニゲサリ給ツル
トイフ。(慶長十年古活字本沙石集・八)

・学而不厭トハ、学文ヲスルニ、始ハコトゞシクスレ
ドモ、ドコノ程カラヤラ打置者也。(応永二十七年本
論語抄・述而)

こういう動きも、古来の代表的な疑問助詞「か」が、係り結び体制の衰退に伴い、次第に文末で疑問を表示する終助詞としての働きを強めていったことと表裏するであろう。

その意味でも、終助詞「やらん」には、新旧連立的な過渡的形式としての性格がめだつと言つてよい。

疑問系の係助詞が係り結び体制から自由になっていく過程は、文末において終助詞化する道のほかに、もう一つ、文中における副助詞化の道もあった。それは文中における係り用法が、いわばその位置に身を置いたまま、狭義の係り結びの機能を弱め失っていく過程であつた。その文としての意味が疑問表現にはなっていないことから、「か」の副助詞化が確認できる比較的早い例には、たとえば次のようなものがある。

(23) 「時の調子は大事の物にて候に、たれにか音取を吹かせばや」(義経記・六)

・朝廷ノ貴公子タチハ此業ヲバエシルマイゾ。イカホド
カ冠巾ヲ着テ朝廷ニ在ルニマシテ有ルモノヲゾ(四河
入海・二五・三61オ)

終助詞化の動きに比べると、こういう副助詞化の過程は、文中に身を置いたままの推移だけに、その変化の過程を確認するのが概して困難である。

しかし、中世には次のように疑問助詞を文中と文末に併用する形の、新旧連立的な疑問表現の形式もめだつ。そういう場合の文中助詞には、文末助詞との相対関係において、副助詞化の進行が原理的に想定できる点がある。

(24) 誰ニカ訴へ申サムヤ。天皇、此レヲ裁ハリ給へ。(今昔・五・一)

・「われらがこれまで落つるに、此人々留まり給ふは如何なる事をか思召すやらん」(義経記・五)

・「誰か此石淋をなめて、あぢはひのやうをしるべきか」ととふに、(曾我・五)

(25) あま吹きおろす松風の、岩が根騒ぎあたるをば、人やあるかと疑はれ、(伽・唐糸さうし)

このように文中と文末とに疑問助詞が併用された場合、文末のそれが相対的に新しい時代の構文要求に應えるものになるから、文中のそれは旧い体制側のものということになり、その点に新旧の連立性が認められよう。しかし、疑問の標識としての役割は、最終的に文末のそれが発揮することになるであろう。だとすれば、文中のそれには積極的な疑問表示の機能を見込む必要がなくなり、おのずからそれは副助詞へと転ずることになる。その意味で、疑問助詞を文中と文末に併用する新旧連立形式には、本来係助詞だったものの文中における副助詞化をうかがわせる点があると言つてよい。

五、副助詞「ばし」の振る舞い

副助詞「ばし」は、平安末期に出現し、中世に一般化し

たものである。しかし、近世には早くも姿を消していった。その成立については、格助詞「を」と係助詞「は」の熟した「をば」の「ば」に副助詞「し」が付いてできたものと見られている。⁽¹⁾更級日記には「ばしも」の例もあるので、「ばし」の「し」は、「しも」の「し」と説かれることもある。

「ばし」の形成・使用された時期の中心は、中世とちやうど重なる。したがって、そのこと自体、「ばし」の形成・使用が、古代語から近代語への過渡期現象と解せる可能性を示唆するが、その用途においては鎌倉期と室町期とでかなり異なる様相を呈している。鎌倉期の「ばし」には、多様な表現と共起した例が拾えるが、その用途は次第に局限化し、室町期には、その共起するものが禁止表現と疑問表現とに著しい偏りを見せる。結論から言えば、その室町期を中心とする偏りには、やはり係り結び体制末期における機能上の新旧連立性を認めることができるのであり、ここにやや詳しく「ばし」の振る舞いを取り上げるのも、そういう史的解釈を提示するためである。

まず、鎌倉期における「ばし」の用途の多様さを示そう。鎌倉期には次のように、(26)断定表現、(27)推量表現、(28)仮定表現、(29)命令表現などに用いられた「ばし」の例がある。

(26) 名句ハイミジケレドモ、不覚バシキワメテケリ。(梵

舜本沙石集・六

・奥州ヨリ知識ニ仰マイラセテ、坐禪・学問バシモ、一心ニ勤行ノ志有テ上タレバ、典座ニサ、レマイラセタル事無ニ本意一次第也。(雑談集・二)

(27)ソレバシ、アナカシコ御アイシライ候マジ。(雑談集・九)

(28)心も知らぬ人を宿し奉りて、釜ばしも引きぬかれなば、いかにすべきぞと(更級)

・袈裟著テ行メバシセバ、仏トゾ云ハン(雑談集・一)

(29)クツノ捨物ヲ法師ニナシテ、「乞食バシモセヨカシ」

トテ、髪ヲソリ、衣ヲ染タリ。(梵舜本沙石集・四)

しかし、その後「ばし」の用途は次第に局限化していった。室町期になると、すでに述べたように「ばし」の共起する例のほとんどは、禁止表現か疑問表現になる。

五の一、禁止表現と「ばし」の共起

まず、「ばし」と禁止表現との共起について述べるが、その共起傾向自体は、より早く鎌倉期から始まっているように見える。鎌倉期の「ばし」は、まだ禁止表現と疑問表現にのみ集中してはいなかっただけである。

次の(30)は鎌倉期、(31)は室町期の例である。鎌倉期の例も、このように種々の文献から広く得られるので、その点に禁

止表現との共起傾向が強まっていたことがうかがえる。

(30)敵に頸^{くび}ばしとらすな。御方^{みかた}へとれ。(金比羅本平治・中)

・是ばし出しまいらすなとて(覚一本平家・六・小督)

・我ればし恨みさせ給な。(日蓮消息・四条頼基宛)

・此御房ニ、其布施皆バシスルナ。(梵舜本沙石集・六)

・我しりがほにばしあるな。(とはずがたり・三三)

(31)「吉次めに目ばし放すな」とて喚^{おめ}いてかゝる。(義経記・二)

・「……さしちがへてはしぬるとも、雑兵の手にばしかゝるな」といひつゝ(曾我・五)

・父御は御物詣とて御留守にて候。悪狂ひばししますな。(謡・竹雪)

・サシサダマリタル祭り飲食ナンドラバシ禁ズナゾ(史記抄・孝文本紀・七32オ)

・カマイテ麦ノ苗葉ヲバシシゲカラスルナゾ(四河入海・四・一27ウ)

・あなかしこ、道にて御眼^めをばしあき給ふな。(伽・梵天国)

古代語の禁止表現には、より婉曲な禁止の表現形式として「なーそ」があった。その形態自体は室町期にも存続しているが、室町期にはたとえば次のように、「そ」に上接

する動詞連用形には、音便形がよく現れるようになっていく。

(32) イカニ歳ガ不登レバトテ天下ノ人ニ物ナクウソト云理
ハナニガアラウゾ (史記抄・孝景本紀・七51ウ)

・母トヨムゾ、母ト云ヘバ、同ジヤウニ、ナアツソト云
ゾ (玉塵抄・一)

・今より後はいまくしうなゝいそとこそ申けれ。(幸
若・大臣)

また、次の(33)のように「な」が現れない例や、その逆に
「な」が重複する、(34)のような例も、中世には比較的よく
見かけるようになってきている。

(33) 「世ノナラヒニ候ヘバ、ナゲカセ給ソ」 (愚管抄・四)

・イカニワ僧、我ヲバ恨ソ。(雑談集・十)

・日やをじやりそ。しよんぼと濡れたがよい物を。(狂

言歌謡・八一)

・カマイテ人ニ見セソ。⁽²⁾チト我トバカリ見フズト云タ
トアルゾ (蒙求抄・四51ウ)

・方々さのみ驚きたまひそよ。(説経・あいごの若

・少しもこ気遣ひあられそ (araseso) (エソポ・四二四
頁)

(34) 卯の花がさねな、なめさいそよ、月にかゝやきあらは
るゝ。(閑吟集・五七)

・また今御酌に参るもの、夫の小栗のおためなり。深き
恨みな、な召されそ。(説経・をぐり)

これらの状況は、古代語以来の「なーそ」形式にも、中
世には一語的な熟合化が進んでいることを思わせる。例(32)
(33)は動詞連用形と「そ」との熟合化を、また、例(34)は
「な」と「ーそ」との熟合化を、それぞれ思わせる点があ
る。その熟合化に伴って、室町期の「なーそ」の類は、そ
の表現価値においても、終助詞「な」による禁止表現とあ
まり差のないものになっていったように思われる。『ロドリ
ゲス日本大文典』(第一巻・否定第一種活用)も、「上ぐる
な」式の形と「な上げそ」式の形を単に並べるだけで、そ
の違いには触れていない。そういうことも室町期の「な
ーそ」の類が、表現価値において終助詞「な」とあまり差
のないものになっていったことをうかがわせるのである。

しかし、「ばし」の共起した禁止表現は、両形式の中で
も、終助詞「な」によるそれに著しく偏るのである。ただ
一例、「なーそ」の類との共起に含めうる、次のような例
が拾えたが、これは例(33)の仲間で、「な」が現れない
「ーそ」と共起した例である。

(35) 「此近辺ニ候者也。夜々聴聞シタク侍リ。門バシバ
ラクタテラレ候ソ」ト云。(雑談集・九)
ちなみに、「ばし」の語源の一部になった「をば」には、

次のように室町期にも「なーそ」と共起した例が見られる。

(36) 願君——奉陽君ノ様ニ弁士ヲワルクアイシラウタリナ
ンドスル事ヲバ、ナメサレソ (史記抄・蘇秦伝・一〇
67ウ)

・言ハ、チツトナリトモ、人ノカシラヲバ、セヨ、人ノ
下ヲバ、ナシソ (史記抄・蘇秦伝・一〇70ウ)

さて、終助詞「な」による表現と「なーそ」の類によるそれとを比べれば、終助詞「な」による表現では、「なーそ」の類のように特にまとまりをなす部分がないだけ、禁止しようとする事柄も、まず一続きに取りまとめられることになる。その点で、「なーそ」の類よりも、事柄の取りまとめをめざす新しい構文要求に応える面があったであろう。それに加えて、例(33)の第四く六例のように、陳述副詞「かまへて／＼かまひて」、程度副詞「さのみ」「すこしも」などの共起も、事柄が一続きにまとまるだけ、容易になるという利点もあっただろう。これらの例においても、そういう副詞の發揮する意味作用が、「なーそ」における副詞「な」の脱落を手助けしたのではないだろうか。

「なーそ」の類と、終助詞「な」との表現価値における接近は、やがて前者が姿を消すことになるその後の経過から見ても、終助詞「な」による統合へと、両形式がいわば一本化していく動きである。その終助詞「な」の禁止表現

に多用された「ばし」は、事柄の取りまとめをめざす新しい構文要求にも応えうる形で取りまとめられた、その中でいわば禁止の焦点に当たる部分を示すことになった。終助詞「な」と副助詞「ばし」との共起は、そういう時代の要求に沿って、終助詞「な」による禁止表現への一本化を、より円滑化する役割を果たしたのではないだろうか。

なお、終助詞「な」による禁止表現は、古代語では相対的に強い対他的な働きかけを分担していたが、「ばし」の共起による焦点の明示化は、対他的な働きかけという点では、その本来そなえていた強さをかえって和らげる効果も併せて伴いえたであろう。

しかし、「ばし」と終助詞「な」との共起に関する史的解釈は、もう一つの重要な共起対象になった疑問表現とのそれと併せて考える必要があろう。禁止表現との共起だけを切り離して、十分な解釈が下せると考えるべきではない。

五の二、疑問表現と「ばし」の共起

疑問表現と「ばし」との共起傾向も、それ自体としてはすでに鎌倉期からうかがえる。ただ、鎌倉期には、まだ禁止表現と疑問表現にのみは集中していなかっただけである。しかし、鎌倉期の「ばし」は、たとえば次の(37)のような文末の「か」とのほか、(38)(39)のように、係助詞「や」の文

中用法や、文末の「やらん」とも共起している。

(37) 「むくろに手ばしおひたりけるか」ととふに、(宮内

庁書陵部蔵一本古今著聞集・四三九)

(38) 「マボリバシヤモチタル」ト云ニ、「サル事ナシ」ト

答フ。(梵舜本沙石集・七)

(39) もしこのことはりななどにばし、ひきかけられさふら

ふやらん。(歎異抄)

文末における疑問の表示は、「やらん」によるのが鎌倉期にはより一般的であり、文末の「か」との共起はまだ少数派であつた。

なお、鎌倉期の疑問表現と共起した「ばし」には、次のように格助詞がそれに下接する点で準体助詞性の認められる用法もある。こういう例の「ばし」には、同じく準体助詞的な用法も多い副助詞「など」との類似性もうかがえて、上接語の概念を不定化する働きもかえつてめだつように思う。

(40) 「小法師トモヲボヘズ。余人バシガ妄語シテ取カ」ト

テ(雑談集・二)

・行業バシノチカラニヤト疑ケル。(雑談集・九)

しかし、「ばし」の共起が、その表現の焦点の明示化につながることは、禁止表現と共起する場合についても認められた。準体助詞的な用法にめだつ不定化の働きも、疑問

表現と共起する場合一般に置き換えれば、疑念の焦点を明示化する働きに通じるだろう。

古代語の疑問表現では、疑念の焦点になる成分を卓示強調すべく、係助詞「か」「や」が係り用法として介入しがちであつた。時代が下るにつれて、疑問表現においても解答になる事柄全体をまず一つに取りまとめることによつて、主要な成分の論理関係を明示化する要求が出てきた。先述の「やらん」も、その新しい構文要求に応じて形成されたものであつた。

だが、「やらん」は新旧連立的な形式をもとに比較的早く形成されただけ、その積極的な役割が終了する時期も先述のように早く、室町期の口語では、「やら」の形でむしろ不定的な意味を添えるだけの副助詞性がめだつてくる。そしてその時期、疑問詞の共起しない特定方式の疑問表現では、古代語以来の疑問助詞「か」を文末に用いる、より新しい形式が顕著になるのである。しかも、そこにめだつてくるのが、次のような「ばし」との共起であつた。

(41) 共王モ三女ヲ一人デマリ不猷ホドニバシニクシトテ滅シタカゾ(史記抄・周本紀・二七八)

・言ハ風ノソ／＼ト吹ハ、アハ虎バシ嘯カ、アラコワヤゾ(四河入海・一・二二オ)

・千瞳ト云ゾ、千ノ字不審ナリ、……字バシソコネタカ

ゾ（玉塵抄・二）

・誰なるらん。変化のものか、又は唐糸が討手にばし向く人か。（伽・唐糸さうし）

これらの例で「ばし」が現れた位置は、古代語の疑問表現なら、疑念の焦点を示すべく、係助詞「か」「や」が介入したはずの位置である。室町期を中心に、「ばし」はそういう位置に現れて疑念の焦点を示すようになったのである。

「ばし」がよく共起するようになったその疑問表現の形式は、疑問の標識の「か」を文末に置くことによって、解答案になる事柄は一つに取りまとめられており、その点で新しい構文要求に適う態勢をとっていることになる。しかし、「ばし」で疑念の焦点が示されているという点では、係助詞「か」「や」によってそれを明示してきた、古代語の係り結びによる表現とも類似する点をそなえているのである。そう考えれば、その「ばし」には、旧い体制における係助詞の係り用法のいわば代役をつとめている側面が認められよう。係助詞の係り用法の代りに、「ばし」が疑念の焦点を示すべく、その位置に置かれていと考えれば、「ばし」と文末の「か」との共起は、旧い係り結びによる疑問表現の形式に慣れた人々の感性に対しても、係り結びによらないことへの違和感や抵抗を和らげることができた

であろう。言うまでもなく文章語では、なお旧い係り結びによる表現形式をごく普通のこととしていた時代である。

疑念の焦点を「ばし」で明示する形式は、したがって、無意識のうちに歓迎され、多用されることになった。それが「ばし」と疑問表現との共起を決定づけたのではないだろうか。

『ロドリゲス日本大文典』には、「ばし」の働きを次のように述べて、疑問表現と共起した例のみをあげている個所がある。

この副詞は或動詞の前に置かれ、時には疑問語を伴ひ時には伴はない。又ある場合には多分といふ意を表し、他の場合には単に品位を加へるだけである。（第二

巻・副詞の構成）

疑問表現と共起する場合の働きを中心にして、「ばし」に「品位を加へる」といった表現価値も指摘しているのである。そのように感じられたとすれば、そういう効果も「ばし」によって生じる、旧い係り結びとの代替性、その代償性によることと解釈できる。

なお、疑念の焦点を示すはずの「ばし」が、「多分といふ意を表」すとも解せるのは、焦点を限定することが、疑問表現の場合にも、文末の「か」が本来そなえていた対他的な働きかけの強さを和らげる効果も併せて伴いえたせい

であろう。禁止表現との共起に関しても、禁止の焦点の明示化は対他的な訴えの和らげに通じると考えたように。

「ばし」と共起する疑問表現が、係り結びのように焦点になる成分とその他とを二分しきることなく、事柄を一つに取りまとめながら、同時に係助詞「か」「や」の係り用法に似た代替性・代償性もそなえて、旧い体制に慣れた人々にも迎えられたとすれば、その「ばし」は、係助詞「か」「や」の係り用法を払拭して、「か」を疑問の標識としては文末用法だけの終助詞に収斂させていくことにも、手を貸したことになる。しかし、逆に言えば、係助詞「か」「や」の係り用法の代替性・代償性が認められる限りにおいて、その「ばし」には、なお係り結び体制の名残を認めることもできよう。その意味で、「ばし」と、文末で終助詞化していく「か」との共起には、やはり機能的な新旧の連立性が認められよう。

先に述べた禁止表現との共起の偏りも、このような疑問表現との共起の偏りと抱き合わせの形で進行し維持されたものであった。終助詞化する「か」との共起の偏りに、新旧の連立性が認められるということは、同様に焦点を明示化する禁止表現との共起も含めて、室町期における「ばし」の共起の全体を、係り結び体制の最終期における新旧連立形式の一つと認めてよいことを示している。「やら

ん」の形成などに比べれば、この新旧連立形式は、副助詞「ばし」が比較的新しい造語であるだけでも、「新」の比重のほうがすでに大きくなったそれである。禁止表現との共起も含まれて、それだけ旧い体制との連関も、輪郭がやや紛らわしくなっているが、そのことも論理的な成分関係を重視する新しい構文体制がかなり出来てきた時期の連立形式の所以であろう。

六、おわりに

本稿では、狭義の係り結びが、その周辺の構文規則と連関しつつ古代語の構文を構造的に特徴づけていたという見方のもとに、係り結び体制という一つの構文体制を考えた。中世においてその係り結びの規範が崩壊する通時的な変化も、その係り結び体制の衰退と、それに取って替わる新しい構文体制への移行として捉える試みをした。

狭義の係り結びは、その呼応を規範とする係助詞の係り用法が、その上接成分を卓示強調する強い情意を介入させることによって、主述関係を初めとする文の主要な成分を二分することになる構文上の仕組みと解し、そういう方向の構文傾向を係り結び体制の基本的な特徴と見なした。また、狭義の係り結びの崩壊は、そのような強い情意を文中に介入させることなく、構文上、主要な成分は論理的にま

ず取りまとめるという方向への変化と概括し、そういう方向をめざす構文傾向を、係り結び体制に取って替わる新しい構文体制の基本的な特徴と見なした。新しい構文体制の特徴は、構文における相対的な論理重視にあると見たものである。

そういう見方のもとに、中世における係り結びの崩壊とその周辺に現れる諸現象を眺めて、旧い係り結び体制側の形式や機能と、来たるべき新しい体制側の形式や機能とを識別してゆけば、旧い係り結び体制の末期である中世には、さまざまな形で機能面での新旧連立形式が認められることを指摘し、旧い体制から新しい体制への推移を円滑化する上では、そういう連立形式の果たした役割も小さくはなかっただろうと考えた。

しかし、係り結び体制と言いながら、狭義の係り結びと連関する、その周辺の構文規則として言及し得た古代語の形式は、格助詞・接続助詞という、論理関係の表示を担う語ばかりであった。狭義の係り結びに類似する広義の係り結びについても、古代語の接続法についてわずかに触れた連関性を除けば、係り結び体制とは連関しない面のあることを指摘するにとどまった。そういうものの分析に立ち入る余裕はほとんどなかったので、係り結び体制の構造について、特に不十分な点が多い。

注

- (1) 拙稿「古代語ノ・ガの関係表示」(『国語と国文学』六九・一、平成四・一一)。
- (2) 拙著『古代接続法の研究』(昭和五五、明治書院)第二章、拙著『日本語接続法史論』(平成八、和泉書院)第二章・第五章など。
- (3) (2)の拙著『古代接続法の研究』第十二章。
- (4) そういう結びの乱れの状況を調べたものに、日本古典文学大系『今昔物語集』三〇五の各「解説」、坂詰力治『「御伽草子」の文章』(『武蔵野文学』三二、昭和五九・一一)がある。
- (5) (2)の拙著『日本語接続法史論』第十章。
- (6) 拙著『日本語疑問表現通史』(平成二、明治書院)第八章、一七一頁。
- (7) (1)に同じ。
- (8) 山田孝雄『日本文法論』(明治四一、宝文館出版)。
- (9) 準体的な句に指定辞が下接する場合の、準体句性の可変傾向については、すでに述べたことがある。(2)の拙著『日本語接続法史論』第八章。
- (10) 拙稿「疑問助詞「やらん」の成立」(『語文』五三・五四、平成二・三)。
- (11) 山田孝雄『平家物語の語法』(大正三三、宝文館出版)に「バシ」は平安朝の末にあらはれたるものにして、そのはじめは「ラバ」の意の「バ」の下に「シ」の付属せるものなりしが、いつしか転じて副助詞の性質を有するに至れりとある。

(12) 土井忠生訳注『ロドリゲス日本大文典』(昭和三〇、三省堂)。

(13) 疑問詞を疑問表現の標識とする不定方式に対していう。(6)の拙著『日本語疑問表現通史』。

